

「欬憾」あるが故の「創格」——沈葆楨の鄭成功評価についての試論<sup>(1)</sup>——

劉 静 貞  
(小二田 章 訳)

はじめに

二千年前、孟子が梁恵王に面会した際、王は「千里を遠しとせず来たからには、我が国に何か利があるのか？」と問い、孟子は生真面目に「王の言われる利とは何でしょうか？ ただ仁義あるのみです」と答えた。彼がそのように言うのは、「上下共に利を求めれば国は危うい。……義を後にして利を先にして、奪い取らねば満足しない。未だ仁にして親族に贈り物をする者、義にしてその君に従う者がいない。王は仁義のみを言うべきであり、なぜ利を言う必要があるのか？」ということである。

歴史研究は特に人の転変に注意するものであるが、その往來の間に、人の選択が歴史の進行方向に影響を与え、あたかも見えざる手がその浮沈を手引きしているかのようである。孟子は義と利によって人事を述べたが、これは現代の経済学者の経済学を説くことが実際のところ倫理学であることと同じである。経済学は個人の「利を求め<sup>(2)</sup>」行為の検討に注力するが、これは人生をよりよいものにしたいたいということが出発点にあり、それは人が人としてどのようにあるべきか、人は他者とどう係わるべきかという問題に及び、さらには人がどのように生存すべきかという思考に結びつくものである。昔の人の作為を探索する時には、そ

の作為にどのような価値・意義が見いだせるか、その作為は人性あるいは理性のどの側面で最終的に選択されたものなのか、などを追究する。それによって、我々は義・利といった観点からの選択の理解にとどまらず、その選択自体が直面したものに對する評価に及ぶことができるのである。

清末、海防強化を目的に台湾統治政策が変更された結果、鄭成功（一六二四～一六二）の歴史的地位と評価にも変化が生じたことは、前述の「思考」を考える上で有用な事例を提供するものである。光緒元（一八七五）年、清朝の批准を受けて、もともと民間で私的に祀られていた鄭成功の「開山王廟」が「延平郡王祠」に改建され、官員・士紳らが鄭成功の忠節・正義を称賛する詩文聯句をこもごも作成した。この一場の行為は、通常は清朝に従って地方を安撫し、民気を奮い立たせるものと解釈され、故に鄭氏の忠君愛国が強調され当時の外国への対抗が現在の需要に結びつけられている。本稿は欽差大臣であった沈葆楨（一八二〇～一七九）が、延平郡王祠に書き付けた聯句のなかの「創格完人」という語に注目し、それぞれの時代の中に沈・鄭の二人を位置づけて、中国の伝統が現代へと向かう巨視的な変化のなかで、彼らがそれぞれ求め選択したこと、その背

景にある時代の文化、そして彼らの保持した価値観とその人生の意義を、改めて検討するものである。

## 一 失敗英雄の再評価

沈葆楨が鄭成功のために書いた聯句は、現在も台南市開山路にある延平郡王祠に掲げられている。文字は以下のとおりである。

開萬古得未曾有之奇、洪荒留此山川、作遺民世界、  
極一生無可如何之遇、缺憾還諸天地、是創格完人。

（萬古を開き未曾有の奇を得 洪荒此の山川を留め 遺民世界を作す 一生を極め如何すべきの遇無く 缺憾諸天地に還る 是れ創格完人たり）

この聯句の、上聯は間違ひなく台湾を指し、下聯は鄭成功評価を示している。

伝世文献を見ると、それぞれが記載したこの聯句に、字句の違いがまま見られる。ある者は「開千古」とし、ある者は「逸民世界」とし、ある者は「成創格完人」としている。<sup>3)</sup> 私見では、清人の文章では基本的に「開千古」とあるが、この台南延平郡王祠の書跡、及び『沈文肅公牘』に採録された尺牘「復吳桐雲」では「開萬古」となっている。

音韻に詳しい研究者に尋ねてみたところ、おそらくこの聯句は對聯の規則が緩やかな「寛對」であり、下聯の「一生」の平仄が「仄平」であることから、記録者が記録時に平仄を揃える目的で「千古」に書き直したのではないかと推測していた。ただ、萬古であれ千古であれ、本稿の主要対象は沈葆楨の「缺憾」と「創格」の方である。

沈葆楨はその時三對の聯句を同時に作っているが、残りの二聯句は次のようである。<sup>(4)</sup>

海上視師、紫陽於五百年前、早為後賢籌結局、

天南晞髮、緬甸在八千里外、特延閩朔付孤臣。

(海上視師 紫陽五百年前にて 早くも後賢の為に結局を

籌せり 天南晞髮 緬甸八千里の外に在りて 特に閩朔を

延きて孤臣に付せり)

到此地回首凄然、只剩得江上一些兒流未枯眼泪、  
將斯人苦心參過、更休說世間有那種做不了難題。

(此の地に到り回首すること凄然 只だ剩まし得たり江上  
一些兒流の未だ眼泪を枯らさざるを 斯の人を將て苦心す  
ること參過 更に説くを休めん世間那種の做し了らざる難  
題有るを)

これら三對の聯句は沈葆楨が吳大廷（一八二四～七七。

かつて按察使銜にて分巡台湾兵備道の任にあった）に送った手紙の中に記録されていた。沈葆楨はまず吳大廷が鄭成功のために作った七律<sup>(5)</sup>を稱賛し、「大木（鄭成功の字）の英靈が雲に乗りやってくるのを聞くかのようにだ」としている。続けて、自らが祠のために三對の聯句を書き、祠落成の公文が来るのに備えていることを述べ、「書きやすいように書いたので、特にこだわりはもっていない」としている。

このこだわりはない云々は当然本人の謙遜であり、三つの聯句の配列には作者にとつての出来の上下が暗示されている。後の二聯句と比べてみると、「孤臣」の一身の慨嘆、「做不了難題」の無力に対し、「缺憾還諸天地」の闊達、「是創格完人」の肯定であり、「孤臣」にも自在闊達のイメージがあることを表現し、また「創格」によって「完人」となる理由を指し示そうとするものである。

このように、自らの所屬する政權に嘗て抵抗を試みたある反逆者を取り上げ、正の評価を与えることは、朝廷の疑念を招いたりはいしないのだろうか？ それについて、沈葆楨は同治十三（一八七五）年十二月初五日に上呈した「請建明延平王祠摺」にて、婉曲な説明を行っている。彼はま

ず、台湾府進士の楊士芳（一八二六～一九〇三）ら地方士紳の請願や祠建設の理由を引用し、鄭成功を「若くして儒者となり、国家の恩愛を長く受け、時代の節義に従い、孝行ではなく忠義を行った」として、清朝への抵抗はやむを得ないものであったこと、その祀られた後は大水旱魃の災害時には「速やかに験があり」民の保護に功績があつたと述べている。その後は再び鄭成功の孤忠を称賛し、「千年の臆病をも治し得る」とし、併せて康熙年間の詔書「朱成功は明室の遺臣であり、朕の乱臣賊子ではない」を取り上げられている。改めて、鄭氏の故郷である南安には既に祠が建てられており、台湾においてはより明確に祠を建てる道理が存在すること、諡については、明に殉じた瞿式耜（一五九〇～一六五二）、張同敞（？～一六五二）らがそれぞれ忠宣・忠烈の諡を得た故事と比べながら提案し、鄭成功を評価することで「台湾の民に忠義を大に行うべきことを知らしめ」、「風俗を鼓吹し人心を正しくする」ことが期待できると強調している。<sup>(6)</sup>

清の朝廷は沈葆楨の説得に心え、光緒元（一八七五）年正月十日戊申に諭旨を下し、鄭氏が「節義を守り、忠烈あきらか」であることに同意しつつ、民間で私的に祀られ、

「水害旱害の際、祈れば験があり」台湾に功績があつたことを挙げ、そのため「輿情」に従い、「請願内容を検討し、台湾府城に個人を祀ることを許し、また諡を加えて与える」とした。<sup>(7)</sup> ここに、もともと民間の私的な祭祀であつた「開山王廟」は「延平郡王祠」となり官の祀りに加えられた。<sup>(8)</sup> 清朝宮廷は鄭成功の諡に「忠節」の二字を採用したが、これは一般の郡王・親王が一字の諡を得る原則と異なり、「一級降格」を暗喩するものであつた。しかしながら、地方官は続々と延平郡王祠に掲げる聯句を献上し、結果として鄭成功の「忠君・開拓者・地方の保護神」としてのイメージを固めるものとなつた。<sup>(9)</sup>

鄭成功に対する各種の称揚の中で、「忠君」「開拓」といったものは、亡国亡命の悲痛と結びついている。しかし、沈葆楨の「創格」完人の形容は、遺恨という段階を超越しており、間違いなく特別なものは、沈氏のこの「創格」は鄭氏の「一生を極めるに時のめぐりあわせが無かつた」という「缺憾」と結び付いている。以下、まずは鄭成功の経た「めぐりあわせの無い」一生に注目し、「缺憾」の理由と「缺憾」の由来、意義について討論したい。

## 二 「めぐりあわせの無い」ことの「缺憾」

### ——鄭成功の人生選択——

鄭成功を研究する学者は、往々にして史料欠失により、その生涯を再現することができず悩む。鄭成功の容姿はどうだったのか、髭はあったのかなかったのか。彼は王を称しました藩を称したが、どこまで明朝に忠義を持っていたのか。長江河口にて敗れ部将は寝返ったが、彼の政治・軍事の才能・統率力は高かったのか低かったのか。これらの問題は、学界が論争して定められないものである。ただ、沈葆楨の目に映った「缺憾」を理解するためには、細かい人生の道筋を求める必要はなく、鄭成功の出身・境遇（彼が直面した変化、その位置する文化風）そして彼の為した選択によってすれば、我々が彼の直面した困難を想像するのに十分であり、それによって「缺憾」にたどり着くことができよう。

日本の平戸に生まれた鄭成功は、七歳の時、父親の鄭芝龍が明朝の招撫を受けたことで、中国に連れて帰られ、中国の名前である「鄭森」を名乗るようになった。それまで母親と離れずにきた彼は、毎夜「必ず東の方を望んでため

息をつき、母を求めた<sup>10)</sup>。周婉窈の「海洋之子鄭成功」では、鄭森の当時の心境を「泉州語が話せないことの他、急に巨大な血縁と疑似血縁による大家族の中に身を置き、生母から離れて『嫡母』に仕えなければならず、読む本は中国の經典になること」を心配していたと描いている<sup>11)</sup>。想像・思索を禁じ得ないのは、「読書類敏」<sup>12)</sup>「初識字、輒佩服春秋之義」の鄭森が、経書の中の「非我族類、其心必異」<sup>13)</sup>（『左伝』成公四年）のような語句を目にしたとき、自身の半分日本人の血統についてどう思ったのであろうか？

確かめる術もないことだが、宋代以降の中国で「嚴夷夏之防」<sup>14)</sup>「華夷之辨」などの概念が強調されていく中、彼ら海盜集団において、アイデンティティの識別をする意味はあったのだろうか。ただ、彼が南京の太学に入って勉強し、礼を尽くして錢謙益に弟子入りを請うた時、儒家の教育を受けた彼の同門たちは、彼の知りあいかはともかく、その半分「夷人」の出身を気にしていた。また、彼の師である錢謙益が王安石のようにある種聖人のような人物であったなら、いわゆる「夷而進於中国、則中国之」<sup>15)</sup>（『臨川文集』卷一九「時務」）のような話をして彼を慰めただろう。しかるに、『孟子』滕文公上の「吾聞用夏變夷者、未聞變於夷

者也」を読んで、彼は「進於中国」の決意を固めただろうか？ それより、心の底に如何ともしがたい一筋の「缺憾」が浮かんだのではないか。<sup>(14)</sup>

自身にはどうしようもない出身と比べ、鄭成功の臨終の時の「忠孝兩虧」の遺憾は、完全に彼自身の選択によるものである。夏琳『閩海紀要』の記載は以下のようである。<sup>(15)</sup>  
(傍線部は筆者によるもの、以下同じ)。

五月朔、成功感冒風寒、文武官入謁、尚坐胡床談論、人莫知其病。及疾革、都督洪秉誠調藥以進、成功投之於地、歎曰「自國家飄零以來、枕戈泣血十有七年、進退無拋、罪案日增、今又屏跡遐荒、遽捐人世、忠孝兩虧、死不瞑目！天乎！天乎！何使孤臣至於此極也！」頓足撫膺、大呼而歿。時年三十有九、為五月八日也。

五月一日、(鄭) 成功は流感に罹った。文武官が面会に来ると、床几に座って談論したため、人々は病気であることに気づかなかつた。病状が重くなって、都督洪秉誠が藥を調合して進上したところ、成功はそれを地面に投げ捨て、嘆いて言うには「國家が抛り所を失つて以來、戦い続け無念に血涙を流すこと十七年、

進退は共に無意味で、(自身が無力であることの) 罪は日に日に重なっていく。今また辺境に身をかくし、ついに人の世からも離れるとは、忠孝の両方を欠いて、死んでもどうして目を閉じられようか！天よ！天よ！なぜ孤臣をこのような運命に至らせたのですか！」足を乱し胸を叩き、大呼して倒れた。時に年は三十九、五月八日のことだった。

江日昇『台湾外記』では次のようである。<sup>(16)</sup>

五月朔日、成功偶感風寒、但日強起登將台、持千里鏡、望澎湖有舟來否。初八日、又登台觀望、回書室冠帶、請太祖祖訓出。礼畢、坐胡床、命左右進酒。折閱一帙、輒飲一杯、至第三帙、嘆曰「吾有何面目見先帝於地下也！」以両手抓其面而逝。

五月一日、成功は流感に罹ったが、日々無理して將台に登り、望遠鏡を持って澎湖への來船の有無を確認していた。初八日、また台に登って眺めたが、書齋に戻って衣冠を正し、「太祖祖訓」を持って越させた。儀礼が終わり、床几に座り、左右に命じて酒を注がせた。(太祖祖訓を) 一折を見るたびに、酒一杯を飲んだ。

第三折に至り、嘆いて言うには「我は何の面目あつて地下で先帝にまみえんか！」両手でその顔を掻き篦り、死んだ。

楊雲萍はかつて各種の鄭成功の死亡時の状況に関する記事を収集整理したが、結局鄭成功の臨終の状況はどうだったのか？ 「面目をかき破った」のか？ あるいは「荒れ狂つて」指を噛んだ」のか？ あるいは「剣をとつて自らの顔を斬った」のか？ でなければ「大呼して倒れた」のか？ あるいは「両手で顔を引き裂いた」のか？ 「顔を覆った」のか？<sup>(17)</sup>十七年の心血は泡になりはてたのであり、多くの史筆が彼の当時の所作をどのように描こうとも、その表現したいものはすべて彼が死に際して恨みを抱くのみだったという心情であろう。

(南明政権の)唐王はその年鄭成功を「忠孝伯」に封じたが、忠・孝は儒家文化中最も強調される道徳規則である。現在の社会でもはじめに「孝」「順」の二字を習うことから「孝」の徳目理解に結びつけているが、「祭祀を守る」ことが「士人の孝」であるとする伝統社会において、「不肖」(父親に似ないこと)が、家業を継ぎ家族を継続できないことを意味することは、理解の鍵となるものである。一

般に言う「忠孝を両全できず」は、もともとこの種の道徳を実践する際に、往々にして孝子と忠臣を分身して果たせないことの難しさを述べている。鄭成功は、支持擁護する政権の対象が違ったことで、父親と決裂することになった。しかも、彼が父親を捨て去って挙兵し明を守り清に抵抗することを決めた際も、そのまま「忠孝伯招討大將軍罪臣国姓」の名で天下にそれを知らしめた。<sup>(18)</sup>「忠孝伯」の称号は大いなる孝行と忠君の美徳を表示するものであるが、それは時に彼が父親を捨てた事実を想起させるものではなかったか？

伝承する者が信じているのは、鄭成功は唐王の知遇の恩、非命に死した母親の仇に報いるため、清朝に投じた父親を捨て、「昔は子供だったが、今は一人の臣となって、行くも帰るも去るも留まるも、それぞれ自ら行うものだ」と言つたという。<sup>(19)</sup>しかし、孝から移つて忠を行ったことで、最後は却つて「忠孝両虧」となつてしまった。その「顛狂」「掩面」「死不瞑目」など、どうして単純な状態の形容でありえようか！ここから、彼と同じく儒家文化の下で育つた沈葆楨の眼中にある、文化の深層に由来する道徳の欠落感、えも言われぬ人生最大の「缺憾」が見て取れるの

である。

孝から移って忠を為したことで鄭成功にとってまた別の層の「缺憾」を引き起こしたのは、文を捨てて武に就いたことであろう。宋代以来、文を重んじ武を軽んずる中国の社会において、それは単なる身分の転換ではなかった。鄭亦鄒（康熙三十二年（一六九三）の挙人、四十五年（一七〇六）に進士）の『鄭成功伝』は、鄭成功がその決心を当日のように示したかを次のように描いている。

成功雖遇主列爵、実未嘗一日与兵枋「仿」、意气状貌、猶儒士也。既力諫（父鄭芝龍）不従、又痛母死非命、乃悲歌慷慨謀起師。携所著儒巾、襪衫、赴文廟焚之、四拜先師、仰天曰「昔為孺子、今為孤臣、向背去留、各有所用。謹謝儒服、唯先師昭鑒之！」高揖而去。襪旗糾族、声淚俱并。

成功は主君に出会い爵位を得たとはいえ、実はそれまで兵防の事に関わったことが全く無く、その気迫風貌はまだ儒士のものであった。既に父親（鄭芝龍）を諫めて付いていかず、また母親の非命の死を痛み、悲歌慷慨して軍を起こすことを計画した。身に着けていた

儒者の被り物・袖服を投げ捨て、文廟に行つてそれらを焼き、先師を四拜して天を仰ぎ言うよう、「昔は子供だったが、今は一人の臣となつて、行くも帰るも去るも留まるも、それぞれ自ら行うものだ。謹んで儒服に謝し、ただ先師に照覧いただかれんことを！」高く揖礼をして去つた。（そして）旗を掲げ一族を糾合し、声涙共に下つた。

陳国棟の研究によると、「哭廟」「焚儒服」は共に明末の「諸生」の間で流行した社会性動作（a social gesture）であり、基本的にある種のポーズ（gesticulation）として抗議を強める効果をもたらした。彼は、鄭成功の行つた「哭廟」について、ある一面では鄭亦鄒の言うように、鄭芝龍に清朝に降伏しないよう諫めて効果が無く、また母親の非命の死を心痛し、拳兵の前に「哭廟」を借りて天下に彼の決心を宣言するものであり、また別の一面では、家族・国家が遭遇した命運に対する感情の吐露であるとしている。「焚儒服」については、本来儀式中にあるべき動作であり、また当然文を捨てて武に就く宣言とみなされるものであり、同時に部将に向かつて決心を表明する意味を持っていたらう。<sup>(20)</sup>



「哭廟」「焚儒服」は明末の「諸生」の間で流行した社会性動作であったとはいえ、それは共に一般人にはなじまない大動作であった。明清交替の際に、一部の儒生たちは「哭廟」し、「焚儒服」して異姓の王朝に仕えない決心を表明して、甚だしい場合にはその後自害し国に殉じていた。

彼らと鄭成功は等しく、このパフォーマンスによって抗議を為すのみならず、さらに重要なのは、それが退転なき決別を表現するものであったことである。或いはその中に純粹なパフォーマンスであった人物もいたかもしれないが、鄭成功は本当に父親を捨て、父の命を二度と聞かない「子供」であった。同時に、彼は儒生の文事に別れを告げ、以後軍旅に身を投じ、武力によって抗清の事業を实践したのである。

文を捨てて武に就くことの伝統中国社会における重大性については、「良い鉄は釘にならず、良い男は兵にならぬ」ということわざを見れば簡単に理解でき、あるいは有名な黄仁宇『万曆十五年』の議論、戚継光の当時の苦境からも認識できよう。兵卒出身の戚継光は一生文人士大夫から受け入れられることがなかったが、黄仁宇は明代後期の武官の社会的地位は歴史上の最低点にまで下降したとまで

述べている。彼はその原因を、明朝の政治組織の一元化に帰しているが、その一元化の思想は二千年来の孔孟の道、儒教に根差したものである。この一元性は、軍隊の将領と文官集団とが場を分けて礼を行うことすら許容せず、将領たちは生きて（戦地に）出て死んで戻るものとされ、たとえ大功をしばしば建てたとしても、その社会的影響は一篇の見事な文章には及ばないのであった。<sup>21)</sup>

ただ、国家が既に滅び、それがまた別の武力によってなされたものである場合、武力によって対抗する以外にどんなよい解決方法があるだろうか？ 然るに、鄭成功は数十万の衆を擁し、清朝に対する重大な脅威となったが、甚だしくは長江河口に侵入し、軍隊は南京城下に及び、充分に彼の軍事の才能を披露できた。ただ、彼の勢力は畢竟海上からやってきたもので、当時の人々がいかに讃嘆しようと、また後世の人々がいかに批評しようと、彼は南京城下に半月駐留して兵を動かさず、清人の緩兵の計にかかったのか、あるいは自身の水軍の実力を考慮して上陸を考えなかったのか、いずれにしてもあたふたと撤退して兵将を損じた事実は変えられなかったのである。

重い被害を被った鄭成功は福建の海に戻り、オランダ人

の手から台湾を得て、安定した基地を作り上げた。ただ、天地は非情であり、永曆帝なき永曆十六（一六六二）年に入り、彼の「缺憾」人生にさらに幾分かの遺憾が付け加えられることになった。楊雲萍の指摘するところによれば、正月中に、鄭成功は父親の鄭芝龍や諸弟が殺された情報に接した。三月中には、姻戚の陳霸が清朝に降伏した。四月中には、永曆帝が処刑されたことを知り、また長子の鄭經と弟の乳母の「不倫」、さらには鄭經に従う諸將の抗命といった問題に直面した。どれをとっても受け入れがたいものであり、ましてや「感情激烈、神經鋭敏、個性が強い」鄭成功では何をかいわんや、であっただろう。<sup>22</sup>

ラテン語の諺の“Amor. Fati. Amor Mundi”というものが、直訳すれば「運命を愛し、世界を愛せよ」となるが、意味は「造化が人をもてあそばさうとも、自分の道をひたすら歩まねばならない」というものである。しかしながら、自ら死期を悟った鄭成功にとって、さまざまなものは満たしようなない「缺憾」を思い、彼が肉親の情も身分もさらには生命までもなげうった「一生がめぐり合わせの無い」ものであったことを顧みたとき、その人生の終わりにあたってできたことはただ「狂い」「顔を掻き筆る」だけ

だったのではないか。

百年の後、同様に台湾にやってきた沈葆楨は、失敗英雄の一生を鑑み、彼が「缺憾を諸天地に還」したのを想像した。我々は彼の言葉を信じてよいのだろうか？ それが歴史の真相なのだろうか？ この、個性が強く厳格でせっかちで容易に讒言を信じ、恨みを忘れない鄭成功<sup>23</sup>が、本当に一切を捨て去ったのだろうか？ 実際のところ、これは沈葆楨が自身にむけた期待であり、鄭成功をこのような問題にかかわらずわせる必要はない。既に述べた伝統文化気風の問題を通じて、沈葆楨が何故「缺憾」の二字で鄭成功の一生を形容しようとしたか、理解することが出来る。ただ、この「缺憾」がなぜ沈葆楨に「創格」と見做され、その目的が「完人」であるとされたのか、その評価と意義については、沈葆楨のいた時代と新しい価値・理念の結合について、理解する必要がある。

### 三 「創格完人」の期待——沈葆楨の人と時代——

人生の終点にたどり着き、自身を既に過去のものとして、そのやり直せない人生の「缺憾」を見直したとき、自身は結局「忠孝両虧」の鄭成功であったことを理解したのでは

ないか。同治十三（一八七四）年に鄭成功のために聯句を書き下ろした沈葆楨は、その時まさに台湾を閩浙の海防体系に組み入れようとして、台湾にて防衛体制の構築に力を注ぐかたわら、山地の先住民族慰撫も行っていた。そもそも沈葆楨が台湾に来たのは、牡丹社の生蕃が琉球難民を殺害したことを口実にした日本の台湾出兵が原因であった。

時に総理船政大臣であった沈葆楨は、皇帝の指示を受けて対岸の福州から、「兵と汽船を領し、巡閱を名目に、台湾の生蕃地帯に行つて觀察」しようとした。ただ、彼がまだ出発しないうちに、日本が既に出兵して琅橋（現在の屏東恒春）などに上陸し、台湾が海防上の重要性から注目されるようになったことで、彼は改めて欽差大臣辦理台湾海防兼理各国事務に任命された。<sup>(24)</sup>

福建を離れる前、沈葆楨は既に台湾防衛に関する方針を考えていた。それは、「外交と共同する」「兵器を備える」「人材を集める」「情報に通じる」ことであった。この四項目はごく一般的な方針のように見えて、その実新思考が取り入れられたものだった。「兵器を備える」というのは、鉄甲艦・水雷・新式銃・巨砲を購入して戦力を充実させる、という意味であった。また、「情報に通じる」とは、福州

から厦門経由の台南間に電話線を敷設することを申請し、情報伝達の便を図ることであった。この二項目は沈葆楨が「洋務運動」に参加し、そこで生じた海防建設の理念と関係するものである。

洋務運動が自強運動と同等に見做せるかどうかは、我々の清末改革の歴史認識がどうであるかという問題に及ぶものである。ただ、それらをどう名付けようとも、確かにそれら運動は相互包摂の関係にあつて、清末の一連の改革運動の先発した一環であり、それらの背景となる思想のひとつは、西洋の機械・技術を輸入して軍備の充実を図る洋務論であった。<sup>(25)</sup> 清末の政治改革活動は、中国の現代化と西洋化傾向に関する重要な問題であり、かつて学界では熱い討論が行われた。アメリカの学者である J・K・フェアバンクは、改革の起因はアヘン戦争後清朝が国際社会に強制的に加入させられたことにあり、西洋の刺激に対する反応であるとした。それに対し、中国系の学者である劉広京 (Kwang-ching Liu) は、改革は外圧によるものだけでなく、乾隆以来の人口・吏治などの内部問題が併せて考慮されるべきものであつて、それは伝統的士大夫階層のいわゆる「経世致用」の追求の結果でもあつたと強調している。

ある学者は、晩清の思想は「ウエスタン・インパクト」のみならず、伝統の衝撃をも受けたのだとしている。<sup>(26)</sup>ただ、改革の起因が何であれ、西洋人の中国にもたらず脅威を解決し、清朝政権を保ち、伝統文化を守ることがその明確な最重要目的であった。結局のところ、それは清帝国の政権を保つことができなくなり、伝統固有の文化も守ることができず、洋務から变法へ、そして革命に至ることになり、帝制、清朝と一歩ずつ捨て去り、最後には中国の伝統の核心たる孔子と経書をも捨て去る過程であった。

近年中国の民間人が提起した「明滅亡以降、中華国家は無かった」式の論法は、鄭成功の直面した明の滅亡と清の興起が、単なる伝統帝制中国における王朝交代に留まらず、文明の存亡であったことを強調している。しかしながら、満洲人の建てた清王朝は、結局儒家の思想学術を継承するものであった。清末の西力東漸、中国と西洋が出会った結果、武力上の西風による東風の圧倒のみならず、中華帝国に迫って内部から根本的な変化を起こし、帝国を民国に変え満清を中華に変えて、そして最後には新文化運動により「孔家店の打倒」が述べられ、根本的に孔子とその思想が否定され、「全面的西欧化」が提唱されるに至るのである。

沈葆楨の遭遇したものは、その実この波濤の第一波に過ぎなかった。彼が参画した自強運動は、伝統帝制中国が西方列強に直面して変化を希求した第一歩に過ぎず、追い求めたのも海軍力強化を重んじるだけの洋務であった。制度上からの改革企図は、遂には君民が合同で統治を行うことを望む变法へと至った。満清をひっくり返して民国を創立することを企図した革命は、かつてないほど真に人心を揺り動かした。<sup>(27)</sup>

洋務運動の背景にある指導的思想である洋務論とは、その目的が「夷狄の長ずる技術を以て夷狄を制する」ことにあるとはいえ、最終的には夷狄の長所を認め、夷狄の学問に則ることを願うものであり、その思考の重点はどのよう<sup>(28)</sup>に軍備を充実させて自らが強い状態を求めめるのか、にあった。言葉を換えるなら、鄭成功はおそらく華夷の弁別・隔離には直面することはなく、そんな彼に沈葆楨が最も衝撃を受け連帯を生じさせたのは、文を捨て武に就いたという事実であっただろう。

沈葆楨の生涯を描写する各種伝記において、必ず示されるのは、彼の舅（岳父）が中国近代史上の有名人、つまり改革を追究し、アヘン禁圧によってアヘン戦争を引き起こ

した林則徐（一七八五〜一八五〇）であることで、当然のことながら沈葆楨に与えた影響が強調されている。<sup>(28)</sup>一方で、彼と洋務論の重要な思想家である馮桂芬（二八〇九〜一八七四。彼は林則徐の自慢の弟子であった）などの人物と早くから関係があった。しかしながら、沈葆楨をして真に洋務へと導いたのは、おそらく現実の情勢と彼自身の具体的問題を決しようとする個性であっただろう。このため、沈葆楨は洋務運動のなかで思想上の牽引者ではなかったといえ、その実践面からみれば、彼は福州の船廠（造船所）では八年の長きに渡って建設に努力しており、十分に同治中興の時期の洋務を実質的に領導したキーパーソンとすることができよう。同治六（一八六七）年と同治十三年（一八七四）年の二度、洋務に関する政策の弁論を行った際、彼は改革と洋務の一体性を主張して譲らなかつた。

デービッド・ボン（龐百騰）の研究によれば、同文館の天文数学部増設から、日本の台湾侵入事件の処理まで、沈葆楨は一貫して「変」の必要性を強調していた。程朱理学の大家である倭仁（一八〇四〜一八七二）などが固有の人材育成方式の堅持を主張し提出したいわゆる「立国の道、礼儀を尚んで権謀を尚ばず、根本の凶、人心に在りて技芸

に在らず」の質疑に対し、沈葆楨は同意し、「中国の心ばえを以て外国の技巧に通じるは可なり。外国の氣風を習つて中国の性情を変えるのは不可なり」という。ただ、彼もまた、いわゆる「自強の処方」は、「善く変える」ものによつてこそ「持久」されることを認識していた。言葉を換えれば、伝統の物差しが新時代の問題を有効に処理できない場合、改変を加えることが必須であろう。伝統を固守する者に相対した場合、「善く変わる」ことは疑いなくある種の「創格」である。何事を変えるべきなのか、またどのように変えるべきか、当然沈葆楨もまた模索の段階を経験していたが、彼は早い段階で中国と西洋の間に技術上の格差があることを認識し、そのため彼をトップとした建設では、西洋の方法を取り入れており、かつ「この時に自強を求めないのは道理がない」ということを強調していた。<sup>(29)</sup>

沈葆楨が洋務に積極的に取り組み譲らなかつたのは、ある部分では彼自身の予測であり、ある部分では福州船廠での実体験のためであろう。中興を求めた自強運動のなかで、船廠の経営は海防のためであり、また商業・航運の需要も計算していた。だが、それはその他の洋務施策と同様に目標は曖昧であり、実際の運営において動揺を生みだした。

船政大臣の経験は、沈葆楨には幅広い改革の実行と近代化事業の促進の必要性を認識させたが、彼自身は自分の任期内で船廠に伝統的環境の中ではベストな運用と拡大をもたらしただけに留まり、人々の思考や方法を真に改変するには及ばなかった。歴史学者は後からの眺めで、沈葆楨の努力、及びその直面した人事・経費・管理等の問題を検討する。だが、沈葆楨自身は伝統文化の思考様式に浸かっており、彼について言えば、社会的問題は儒家思想本体の欠陥から来たものではなく、むしろこの思想から背いたために起こったものと考えていたことを見出すのである<sup>(30)</sup>。

同治十三年（一八七四）年の日本の台湾出兵事件は、沈葆楨の人生を台湾と結び付け、二百年前の鄭成功と交差させた。沈葆楨は同治甲戌の年の五月二十四日（一八七四年七月七日）に台湾に到着したが、彼が家族に宛てた最初の手紙の中で、彼の台湾に対する第一印象を挙げている。

初四抵台湾、上岸之難与他処海口迥不相同、蓋無避風之澳故也。滄海桑田、所謂鹿耳門者、今無港矣。城市湫隘、臭不可近、居民官舍皆低矮不及內地之半。其民俾畫作夜、日荒于嬉、洵所謂異方之樂也。

初四日に台湾に至りましたが、上陸の難しさは他の海港とは違い、これは風除けの入り江が無いことによるものです。海と田畑が広がり、いわゆる「鹿耳門」（外海と入り江を繋ぐ水路）というものはいま港にありません。街は狭苦しく悪臭が立ち込めて、民居も官舎も丈が低く内地の半分にも及びません。その民は昼夜逆転し、日々生活が乱れています。誠にいわゆる「異方之樂」（夷地の音楽は人の心を故郷への思いから悲しませる）というものでしょうか<sup>(31)</sup>。

ここには、彼が「洪荒此の山川を留め 遺民世界を作す」としたところに、当初そのような称賛を持っていなかったことが見て取れる。現実を認識する彼は、一方では外交的に問題を解決し、同時に積極的に防衛施策を行っていた。

嘗て政策論争の中で改革を強調し、船廠の経営にて洋務を実習した沈葆楨は積極的に変化を求める心情を持って西洋の施設を導入し、もともと清の朝廷から鶏肋彈丸の地と見られていた台湾でその建設を進めた。また一方で、彼は地方士紳が清朝に鄭成功の祠建設を申請するのに協力して、鄭成功の歴史的身分・地位を調整したのみならず、台湾の

清朝領域内の位置づけを再定義させたのである。

我々はまだ沈葆楨がどのように鄭成功を認識し、どのように鄭氏の歴史を知り得たのかを知らない。だが、鄭成功の「正道」を堅持することを図った人生に対し、彼が観察し重要視したのは、単に気概と忠節だけではなかったであろう。

皇帝王朝の構造には、社会全体の安定を求めるため、伝統を重んじて改革を喜ばない文化気風<sup>(32)</sup>があり、沈葆楨自身も経験していた。鄭成功が「めぐり合わせの無い一生」に直面し、文化伝統に背く決断をしたとみなして、沈葆楨はそれを「缺憾」と理解し、その中に「創格」を見出していた。「缺憾 諸天地に還り」とは、鄭成功に対する慰めだけではなく、彼が自身に対して注意喚起をしたものであろう。いちいち聖人に依拠することが求められる伝統文化において、ずっと多数の衆人と対抗する自我が期待できようか。

たとえ困難障害や何らかの不足があっても、「善く変化する」「創格完人」の典型は昔からあり続けた<sup>(33)</sup>。少なくとも彼自身が生きている間は、努力し成功の機会を窺い続けたのである。矛盾なのは、鄭成功も沈葆楨も、彼らの「創格」の由来は、彼らの因って立つある種の過去を守ろうと

したことによる。それは政治的でもあり、文化的でもあった。

鄭成功の「一生めぐり合わせの無い」ことの「缺憾」と比べ、沈葆楨は疑いなく非常に幸運であった。歴史の過程で、彼は時が味方しない的な感慨を持つこともあったが、万策尽きたような無力な状況ではなかった。彼が鄭成功のための聯句を書いた際には、洋務の遂行が困難であったとはいえ、中国を救うためには洋務にひたすら頼るほかなく、清朝の命運を保つには自強の他にないという歴史事実は未だ明確にはなっていない。光緒五（一八七九）年、沈葆楨は两江総督の在任中に死去したが、その臨終にも遺疏を口述させ、鉄甲船が未だ製造出来ないことを気にかけていた<sup>(34)</sup>。五年後の一八八四年、フランスの極東艦隊が閩江口に侵入し、馬尾船廠を砲撃して、彼の注いだ心血が水の泡になることを、彼は知らなかった。清朝皇帝に忠義を尽くし、太平天国を討伐し、儒家文化を護った彼は、一九一一年の辛亥革命で民国が成立し、清朝皇帝が退位すること、さらにその九年後には学生たちが北京の街頭に集まって、「打倒孔家店」を高らかに叫ぶのを、もちろん見ることはなかったのである。

#### 四 歴史的存在的意義——むすびに代えて——

過去は既に終わった。顧みて歴史を尋ねるなら、そこには理由が必要であり、結局過去は全て過ぎ去ったものであり、残された歴史はどのように見られるのか、或いはどのように見るべきなのだろうか？ 人事を解きほぐしてみるなかで、少なからず誤解を被り、また少なからず埋没したものがある。我々は過去を再構築／連結することを試みるが、その目的は当時に還ることなのか、それとも現在を理解することなのか、はたまた未来を迎えることなのだろうか。

沈葆楨の聯句に結び付けられた、鄭成功の人とその生涯は、確かに人の感動を生むものであるが、その中に果たしてどれほどの動かしがたい事実があるのだろうか？「缺憾」そして「創格」を語ることは、沈葆楨自身が置かれた状況を浮かび上がらせることはできない。彼の鄭成功に対する肯定は、或いは確かに台湾の民心を籠絡するために必要だったのかもしれないが、おそらくは彼自身が行うことのためにかつての典型を求めようとしたのではないか。彼が鄭成功に見たのは、過去だけではなく、未来でもあつ

た。

私の専攻は宋代の歴史である。洋務運動の中で選ばれて英国に留学して海軍を学び、後に西洋の經典を翻訳しその知識の導入を図った嚴復（一八五四～一九二一）は、熊純如に宛てた手紙の中で次のように述べている。

「古人好讀前四史、亦以其文字耳。若研究人心、政俗之變、則趙宋一代歷史最宜究心。中国所以成爲今日現象者、爲善爲惡、姑不具論、而爲宋人之所造就、什八九可斷言也。中国今日無論是好是壞、宋作成之一。」

昔の人々は好んで前の四史を読んだが、それは文字面を追ったに過ぎない。もし人心や政治風俗の変化を研究するならば、趙宋一代の歴史こそ、最も心を尽くすべきものだ。中国の今日の現象の原因は、善か悪かはさておき、宋人が造ったものが十に八九であると同言できる。中国の今日の何が良くて何が悪いかは、宋が成したものだ。<sup>35)</sup>

宋代史を学ぶ人々は常にこの言葉を励みにし、宋代史を研究することの重要を説く。<sup>36)</sup>しかし、宋代が結局「今日」にどのように影響したのか、宋代史の研究の中に留まるの



では察知することが出来ない。鄭成功から沈葆楨に至る間、彼らが直面したのは正に宋より流れ来たる伝統文化であった。それは華と夷、文と武、さらには忠と孝といった思考であり、全て宋代に思想と現実の衝突と転折を経たものである。我々はこのような概念の指導的作用に思想の硬化化を見て取るが、一方ではその文化としての強さ、さまざまな人生の選択に影響してきたことを認めるものである。沈葆楨と鄭成功の自己の人生行路の選択が似た見かけをしているのは、共にその文化思考の中に留まっていたからである。二人の選択は、愛国・忠君、そして個人の人生設計を犠牲にして集団の利益を護るといった理念・理想に引き付けられているが、その下では容易に義と利の弁別と道徳的水準の向上に帰せられるか、あるいは権威者の広めた思考を記述したものとしてその資料の信用度を質すことになるだろう。ただ、もし現代経済学の利に向かう思惟を加えたなら、或いは軽視できない両者の間の振り子から、その思考における個人あるいは文化の偏向について注意を喚起することができよう。<sup>(37)</sup>

結果論としては、鄭成功と沈葆楨は共に失敗した悲劇の英雄であり、悲劇たるゆえんは、「正確」に時代の風向き

を捉え、相手を撃退し勝利し「成功」することが出来なかったことにある。だが、失敗しても「寇」の名を被せられることはなく、却って英雄として称賛されたのには、後世の歴史記述者の時代状況と関わっている。沈葆楨は中国与西洋が交差する時局にあつて鄭成功を再発見したが、それは復明が果たせずも「缺憾」を諸天地に還した「創格完人」としてであった。モダン・ポストモダンの転折の間にいる我々にとって、歴史を読む意義を新たに考える時にあたり、沈葆楨が洋務運動にあつて自我をどう定めたかを検討し、その心情を読み解くべきである。違う人物が違う時点で振り返る際に、「歴史」は違う意義を持つて現れて別の歴史叙述を形成するのであり、最終的には記述した者とその時代に結び付くのである。

(1) (訳者注) 題名にもある「缺憾」と「創格」については、その語感を生かすため、以後も原文のまま表記する。なお、辞書的には「缺憾」は「満足できず遺憾に思う感覚」であり、「創格」は「新たな風格・方式（を作り上げる）」という意味となるが、そのニュアンスの微細さを行間から見ていただければ幸いである。

(2) チェコの経済学者である「Tomás Sedláček」は、その

『善悪経済学 Economics of Good and Evil』（劉道捷訳、新北、大牌出版、二〇一三年）の中で、経済学がもともと価値中立の学科を標榜してきたことについて思考を巡らせ、経済学は世界を描き出すのみならず、世界のあるべき姿を模索するものであることを強調している（一〇頁）。経済学者はすべからく「我々はなぜ人類が何者かと考えるのか」ということについて改めて考えるべきであり、それは究極的には人類が自由に選択するものであるという信念へと結びつく（四一頁）という。

(3) 連横が編纂し、その自序に「古今の台湾に関わりのある詩を集めた」とする『台湾詩乘』（南投、台湾省文献委員会、一九九二年）の巻五では、最初の句について「開<sub>レ</sub>千<sub>レ</sub>古得未曾有<sub>レ</sub>之奇」とする（一九五頁）。易順鼎『盾墨拾餘』巻六「魂南記」一七頁下（『清代詩文集彙編』七八五冊に収録の琴志樓集影清光緒二十二年刻奩盒叢書本、上海、上海古籍出版社、二〇一〇年）には、光緒二十一年八月己巳朔に延平王祠に参詣し、沈文肅の作つた祠の聯句を見たものとして「開<sub>レ</sub>千<sub>レ</sub>古得未曾有<sub>レ</sub>之奇……成<sub>レ</sub>創格完人」と記されている。また、胡傳の光緒十八年十月十五日の日記（胡傳『台湾日記与稟啓』『台湾文献叢刊』第七一種、台北、台湾銀行經濟研究室、一九六〇年に収録）には、「火神廟・文昌宮・延平王廟の三か所を奉り、人を派遣して香を焚かせた。……侯官沈文肅公が鄭延平郡王に題した廟の楹聯は、  
「開<sub>レ</sub>千<sub>レ</sub>古得未曾有<sub>レ</sub>之奇、洪荒留此山川、作<sub>レ</sub>逸<sub>レ</sub>民

世界。……」と述べられている。ただ、楊雲萍が一九五〇年に書いた「延平郡王祠の楹聯」（同『南明研究与台湾文化』台北、台湾風物雜誌社、一九九三年に収録）には、『台湾詩薈』第六号の千尺「榕西聯叢」の記録が引用されているが、そこでは聯句の文字と現在の延平郡王祠に掛かっている楹聯の文字は全く同じである。連横が創り、民国十三年七月に出版された『台湾詩薈』第六号（影印本、台北、成文出版社、一九七七年）を確認しても、文字は同じである。

(4) 沈葆楨『沈文肅公牘』巻四「巡台四復吳桐雲」（福建省文史研究館編『福建叢書』第二輯、影印福建圖書館藏鈔本、揚州、江蘇広陵古籍刻印社、一九九七年、二四四～二四六頁）。

(5) 原詩は「隆武已薨永明虜、樓船百戰幾會間。聲名嶺海漳潮外、氣概孫郎伯仲間。身死猶存明正朔、節堅何異宋崖山。遺臣天語分明在、穢筆從今要盡刪。」である。（清）吳大廷『小西映山館詩集』巻七「詠延平王朱成功」（『清代詩文集彙編』六九八冊、影清光緒五年刻本、上海、上海古籍出版社、二〇一〇年に収録）を参照。

(6) 『沈文肅公政書』巻五（『近代中国史料叢刊』第六輯、台北、文海出版社、一九六七年、二四頁上～二五頁上）。

(7) 中国第一歴史檔案館編『光緒宣統兩朝上諭檔』（桂林、廣西師範大学出版社、一九九六年）中の序号二一「光緒元年正月初十日條」（八頁）。

(8) 台湾の民間で私的に鄭成功を祀る場合、清朝の耳目を

避けるため、「開山王廟」または「大人廟」「王公」などを名称としていた。鄭道聰「台南延平郡王祠沿革考及祭祀缘由」（『台南文獻』創刊号、二〇一二年）を参照。

(9) 江仁傑『解構鄭成功—英雄、神話与形象的歷史』（台北、三民書局、二〇〇六年）二九—三二頁を参照。

(10) 江日昇『台湾外記』（『台湾文獻叢刊』第六十種、台北、台湾銀行經濟研究室、一九六〇年）卷一、三九頁。

(11) 周婉窈『海洋之子鄭成功』（『面向過去而生』台北、允晨文化、二〇〇九年）三七—三九頁。

(12) 「讀書類敏」については、鄭亦鄒「鄭成功伝」（『台湾文獻匯刊』第一輯第三冊に収録の影乾隆間抄本、九州出版社・厦門大学出版社、二〇〇四年）一六頁を参照。

「見初識字、輒佩服春秋之義。」については、鄭成功の永曆七年癸巳（一五六三年八月）に父親に宛てた手紙の中に見える。楊英『延平王戶官楊英從征実録』（『中国海疆文獻統編 台湾琉球港澳』八に収録の影中央研究院歷史語言研究所一九三二年景印旧鈔本、北京、錢袋書局、二〇一二年）一一二頁を参照。前述の『台湾外記』にも「性喜春秋」との言及がある（巻一、三九頁）。

(13) 前掲の『台湾外記』は、鄭成功が初めて中国に戻った時、「叔父や同輩行の兄弟たちからたびたびいじめられた」としているが、それが彼の半分日本人の血統によるものなのかはわからない（巻一、三九頁）。ただ、清末に革命宣伝冊子として刊行された『浙江潮』上に掲載された匪石「鄭成功伝」では、民族主義を鼓吹して「福松

の叔父・兄弟は福松を嘲って、『お前は』わが中国人から生まれず、わが中国の風を忘れていた」とし、たびたびいじめた」と明言している（『台湾文獻叢刊』第六七種、台北、台湾銀行經濟研究室、一九六〇年、七三頁）。

(14) 伝統中国社会が異民族に直面した時の態度については、邢義田が中国人の天下觀を議論した際に、「伝統的帝王は王者に他なく、天下を一家とする自我が期待されているとはいえ、別の側面では華夷の境を厳にして、華夏の外に夷狄を隔離するべきとされている」ことを指摘している。邢義田「天下一家—中国人的天下觀」（同『中国文化新論—根源篇・永恆的巨流』台北、聯経出版事業公司、一九八一年、四二五—四七八頁）を参照。

(15) 夏琳『閩海紀要』（『台湾文獻叢刊』第一一種、台北、台湾銀行經濟研究室、一九五八年）三〇頁を参照。

(16) 前掲江日昇『台湾外記』巻五、二二—二四頁。

(17) 楊雲萍「鄭成功之歿」（同『南明研究与台湾文化』台北、台湾風物雜誌社、一九九三年）四〇七頁、を参照。なお、原載は『台湾文化』五卷一期（台北、台湾文化協進会、一九四九年）。

(18) 前掲鄭亦鄒「鄭成功伝」二二頁を参照。その他、鄭成功が拳兵の際、旗幟に「殺父救国」と大書していたという記載もある。反論する学者もいるが、定論はまだない。陳国棟「哭廟与焚儒服—明末清初生員層の社会性動作」（『新史学』三卷一号、一九九二年）九三頁を参照。

(19) 前掲鄭亦鄒「鄭成功伝」二二頁。

(20) 前掲陳国棟「哭廟与焚儒服——明末清初生員層的社会性動作」を参照。また、鄭成功が哭廟をした場所については、南安書院と石井書院の間で論争があるが、本稿の要点ではないため、ここでは触れない。

- (21) 黄仁宇『万曆十五年』（台北、食貨出版社、一九八五年）の第六章「戚繼光——孤獨的將領」、特に一七五—一七八頁を参照。この種の「重文輕武」の思考は、唐代藩鎮の禍が宋代の統治政策に与えた影響の中に既に見ることができ、「強幹弱枝」と「重文輕武」は宋代の国策の一体化した両側面であり、それは文臣が軍を領する「儒將」の伝統へと発展していった。劉子健「略論宋代武官群在統治階級中的地位」（『南宋史研究彙編』台北、聯經出版事業公司、一九八七年、一七二—一八四頁）、「從儒將的概念說到歷史上对南宋初張浚的評論」（『国史积論——陶希聖先生九秩榮慶祝寿論文集』台北、食貨出版社、一九八八年、四八一—四八五頁）を参照。
- (22) 前掲楊雲萍「鄭成功之歿」四一—三頁を参照。
- (23) 前掲周婉窈「海洋之子鄭成功」四〇—七頁を参照。
- (24) 蘇同炳『沈葆楨伝』（南投、台湾省文献委員会、一九九五年）一七七—一八〇頁を参照。
- (25) 洋務運動と自強運動の名称と内容については、学者が長きに渡り論争してきた。アメリカの学者マリー・C・ライトは、いわゆる同治中興にて提起された問題であり、清朝政権を維持するためにあつて近代化は考えられておらず、そのため自強を主張する者は洋務を支持し得な

かつたとする。Mary C. Wright, *The last Stand of Chinese Conservatism The Tung-Chih Restoration 1862-1874* (California: Stanford University Press, 1962) を参照。一方で、石錦は洋務が自強の一環であり、單純に提唱しなかつたからといつて軽々に洋務の人々を改革を主張しない人々に区分することはできないとする。石錦「清末自強觀的内容、分野及其演變（一八四〇—一八九五）」（『思与言』六卷四期、台北、思与言雜誌社、一九六八年）九—一八頁を参照。本文は行論の要点を考慮し、洋務を重視した洋務運動、或いは改革を重んじた自強運動というように、二つの名称を兼用する。

- (26) J. K. Fairbank, *Trade and Diplomacy on the China Coast* (California: Stanford University Press, 1969) 劉広京「十九世紀初葉中国知識分子——包世臣与魏源」（同）『中国近代現代史論集第六編 自強運動（一）通論』台北、台湾商務印書館、一九八五年、一〇九—一六八頁）、張灝「晚清思想發展試論——幾個基本論点的提出与檢討」（同）『近代中国思想人物論——晚清思想』台北、時報出版社、一九八〇年、一九—三三頁）等を参照。
- (27) 小野川秀美（林明德、黄福慶訳）『晚清政治思想研究』（台北、時報出版社、一九八二年）を参照。龐百騰（David Pong）（陳俱訳）『沈葆楨評伝——中国近代化的嘗試』（上海、上海古籍出版社、二〇〇〇年）では、晚清改革史を、「早期の経世」「アヘン戦争前後の西方の脅威を防ぐ検討」「同治中興」「制度変革の追求」の四つの段

階に区分する。この分類において、沈葆楨は第三期に含まれる(一七〜一八頁)。

- (28) 前掲龐百騰『沈葆楨評伝』三三〜三四頁、林崇墉『沈葆楨与福州船政』(台北、聯經出版事業公司、一九八七年)四五〜五七頁、前掲蘇同炳『沈葆楨伝』六〜一一頁、などを参照。

- (29) 前掲龐百騰『沈葆楨評伝』第八章「福州海軍船廠—建造和訓練計画」内の「訓練新型海軍人員」、及び第一章「自強之計」、「結論」を参照。

- (30) 前掲龐百騰『沈葆楨評伝』四〇七頁を参照。福建船廠の問題については、林崇墉が前掲『沈葆楨与福州船政』の中で検討を行っているほか、蘇同炳も前掲『沈葆楨伝』にて一章を割いて論説している。その他、王信忠「福州船廠之沿革」(同『中国近代史論叢 第一輯第五冊 自強運動』台北、正中書局、一九五六年。初出は『清華学報』八一、一九三二年)を参照。翻って沈葆楨の手紙を見てみると、常に彼が弟子に儒家の学問の研鑽を促していることが見出される。例えば、「汝等總以詩書治家為最要」、「不能守儒素家風、將來殊難度日」、「經世之学亦從讀書來」等々。『沈文肅公家書』(『台湾文献匯刊』第四輯第六冊、九州出版社・厦門大学出版社、一九四八年)八〇〜八一、八二、一〇一頁をそれぞれ参照。

- (31) 前掲『沈文肅公家書』七九頁を参照。

- (32) 李孝悌は王莽・王安石・康有為の変法を例に中国の歴史上の政治改革を論じ、このような政治気風に対して検

討を加えている。「託古改制—歴代政治改革的理想」(鄭欽仁主編『立国的宏規—中国文化新論・制度篇』台北、聯經出版事業公司、一九八二年、四六七〜五〇九頁)を参照。

- (33) ここでは文天祥「正気歌」から「哲人日已遠、典型在夙昔」を引用する。

- (34) 前掲蘇同炳『沈葆楨伝』二六八頁を参照。

- (35) 敵復『学衡』第三期(一九二三年)一〜一三頁を参照。

- (36) 趙鉄寒「代序」(同主編『宋史資料萃編 第一輯』(台北、文海出版社、一九八〇年)一頁を参照)。

- (37) James D. Gwartney, Richard Stroup, Dwight R. Lee (高翠霜訳)『常識経済学—人人都該知道的經濟常識 *Common sense economics: what everyone should know about wealth and prosperity*』(台北、經濟新潮社、二〇〇七年)では、マザーテレサが資源を考慮した結果、ニューヨークでの慈善活動を放棄し他所で行ったことを選択を例に、人々の選択にどのような影響があるか要因を解析している(二九頁)。

補充説明を行うと、本文は義・利の弁別から始まったが、現実を利の追求とみなす商業の議論については全く検討をしなかった。もちろん、沈葆楨あるいは鄭成功も、その従事した清朝政権への反抗、清朝政権の維持のため、経費の処置に心を悩ませていた。沈葆楨は或いは官僚体系の中の活動だけであつたかもしれないが、海賊にして

国際商人の子である鄭成功にとつては、孝を忠に変え文を捨て武を行う選択をしたとはいえ、その父鄭芝龍が海陸の交易で挙げた巨大な利潤の相続を放棄せず、彼の軍隊はそれに依つて機能していた。この問題を本文中で討論の対象としなかつた主な理由は、新旧の先行文献・研究の鄭成功の山五商・海五商による利益獲得行為については議論したものは、華夷・忠孝・文武といった議論とは結びつかず、多くは却つて大航海時代の海外展開の脈絡で語られているからである。中国伝統社会には輕商・賤商あるいは士商の別に関する記載や討論があるとはいえ、余英時が『中国近世宗教倫理与商人精神』（台北、聯経出版事業公司、二〇〇七年）の書末で論じたように、明清における商人の社会地位及び意識形態には深刻な変化があり、おそらく伝統を突破し得たとはいえ、少なくとも先鋭的な対立ではなかつた（一六一―一六四頁）。

〔付記〕 本稿は「第七六回経済史研究会（国立成功大学歴史学系との研究交流会）」（於大阪経済大学日本経済史研究所、二〇一四年一月二十六日）での報告に基づいて作成した。コメンテータの小田章氏をはじめ、参加諸氏から貴重なご意見をいただいた。ここに感謝を記す。

（りゅう） せいいてい・台湾 国立成功大学歴史学系教授

（記）／こにた あきら・早稲田大学文学学術院

総合人文科学研究センター 招聘研究員